

早稲田大学エクステンションセンター講座

『誰にウクライナが救えるか』

–「はざまの国」の戦争と平和について考える–

第1回 原形はいかにしてつくられたか

2025年11月7日
エコノミスト・元ロシアトヨタ社長 西谷公明

はじめに

- 「はざまの国」
- ロシア、ウクライナと私
- 視点と全体構成
- 統計は何をば語らん

1. 平穏なる独立、その意味

(根底に農業国であること、スラブ農民の穏やかな気質)

- ・ソ連崩壊（モスクワにおけるソ連・保守派とロシア共和国・改革派の権力闘争）によって独立
- ・8月クーデター後、ウクライナ共産党の民族独立派への合流
 - ➡「独立宣言」採択（91.8.24）、出席400人中346人（86.5%）が賛成
 - ➡独立の是非を問う国民投票（91.12.1）、90.3%が賛成
- ・ウクライナ共産党クラフチuk氏の大統領選出（91.12.1）
 - ➡稳健独立派クラフチuk氏（最高会議議長 61.6%）
 - vs 急進独立派チョルノヴィル氏（西ウクライナ・リヴィウ州議会議長 23.3%）
 - ➡国民は安定を選ぶ
 - =国家としての脆さの裏返し（領土と民族の一体性を欠いた独立）

2. ウクライナという国

(1) 繁栄への期待

- ・ソ連のなかでロシアに次ぐ第二の行政単位
 - ➡面積約 60 万平方キロ（ヨーロッパ最大、日本より 1.6 倍以上）
 - 人口約 5200 万（ソ連の人口 2 億 8700 万の約 18%）
- ・産業：ロシアに近い東/南部 = 重工業地帯 vs ヨーロッパに近い中/西部 = 農村地帯
 - ➡石炭と鉄鋼、農業の国（ソ連の鉄鉱石の 45%、鉄鋼の 35%、農業生産の 23% を占有）
- ・言語：東/南部中心に 1100 万のロシア系住民（全人口の 22%。33% はロシア語が第一言語）
 - ➡帝政ロシア/ソ連のもとでロシア語を共通言語としてひとつの社会を形成

（2）ロシア人にとり、ウクライナとは…

- ・ロシア国民のルーツと国家のアイデンティティに関わる土地
- ・ロシアの歴史的な発展と不即不離の重要な一部を成す土地

3. 国造りはいかに為されたか

（1）ロシアからの独立を賭けた闘い

- ・民族主義者主導による国造り
- ・「独立宣言」は、将来の「中立」政策とともに、通貨の発行とウクライナ軍の創設を謳う
 - ➡ロシアは激しく反発、領土問題を喚起（現下の戦争へいたる確執の原点）
 - ➡経済戦争（原油・ガス価格の引き上げ vs 穀物輸出の制限）

（2）「革命」にして「維新」にあらず

- ・旧共産党官僚（首相を含め）が行政の実務を担う
 - 民族独立派は国家統治の経験と技量を欠く
 - 行政機構の不在 = 領土を束ねるための権力機構の消滅
- ➡ソ連の遺構（トカゲの切れた尻尾）に頼らざるを得ず（共産党との妥協の背景）

（3）最初の振り戻し

- ・1993 年夏の政治危機後、大統領選挙で親ロ・クチマ氏が当選（94.7）
 - ➡ロシアとの関係改善、経済安定、新通貨発行へ（96.9）
- ・ウクライナ憲法制定（96.6）
 - ➡「中立」が消える（マイダン政変後、NATO 加盟を憲法に規定）
- ・独立ウクライナをめぐる地政学
 - ➡地政学な選択と民族主義の圧力に揺れて安定を欠く
 - ➡ならば、ガリツィアとは？

以上

早稲田大学エクステンションセンター講座
『誰にウクライナが救えるか』
－「はざまの国」の戦争と平和について考える－
第2回 ガリツィア、「不寛容」という伝説

2025年11月21日

エコノミスト・元ロシアトヨタ社長 西谷公明

- 本日の主題 -

- 「はざまの国」の来歴
- どういう意味で「はざま」なのか？

1. 逝きし世の記憶

- キエフルーシ（9c 後半 – 13c 前半）とは
=キーウを都とする「ルーシ」の公国
 - ・地中海貿易の中継地として殷賑をきわめ、中世ヨーロッパ世界に燐然と輝く（10c末 – 11c半ば）。
 - ・ギリシャ正教の導入（10c末）と公国のビザンツ化
 - ・四分五裂（12c半ば）、モンゴル襲来（13c半ば）により衰退

→ [ロシア史観] モスクワ公国（14c前半）～モスクワ大公国（1480）～ロシア帝国

- ウクライナ・コサックとは
 - ・15-16C、ポーランド王国/リトアニア大公国の南の草原/辺境の守り手として登場
 - ・16-17C、独自の軍事組織と政治文化を有する自治集団を形成

→近代ウクライナの歴史のはじまり

- Q : ウクライナ語はどういう言語か？
Q: いつ頃、どのようにして「ウクライナ」と呼ばれるようになったか？

- ロシア帝国とコサック国家（17C～）
 - ・ロシアの庇護を頼んでポーランドと戦う～ペレヤスラフ協定（メリニツキー、1654）
 - ・スウェーデンと結んでロシアと戦う～北方戦争/ポルタヴァの戦い（マゼッパ、1709）

→ポーランド分割（18C後半）により現在のウクライナの大半がロシア帝国の支配下へ

2. ガリツィア、非ロシアの歴史

- ガリツィアとは
 - ・ウクライナ西部を中心とする地域（ハーリチ・ヴォリニ公国の一端）
 - ・独ソ不可侵条約（1939）の密約によってソ連に占領、併合（1941）
 - ：もともとはポーランドに属す、ヨーロッパの歴史とともに発展
- 「内なるロシア vs 内なるヨーロッパ」を形成
- ユニエイトとは
 - ＝ウクライナ・カトリック（東方典礼を守りつつ、教理はカトリック）
 - ・ポーランド支配下で正教会が分裂、一部がローマ・カトリックと合同（ブレストの合同、16世紀末）
 - ：ロシア/ソ連の支配下で禁止。ウクライナ民族主義の精神的支柱となる（18世紀後半）
 - ・ポーランド消滅後、オーストリア領ガリツィアにおいて、ウクライナ人を統合する反ロシア民族教会と化す
- 宗教における「はざま」（＝異形）を象徴
- 政治意識の一体性を欠いた独立
- 民族独立運動の拠点
 - ・ウクライナ国民共和国（1917）と西ウクライナ国民共和国（1918）の樹立
 - ・独ソ戦とウクライナ民族主義運動、ウクライナ蜂起軍（UPA）と反ソ連パルチザン
- ソ連崩壊末期、中心都市リヴィウで人民戦線「ルーフ」が結成

3. マイダン政変（2014年2月）、その後

- 地政学的選択に揺れる
 - ・「10年毎に革命が起きる」
 - ：1994年東へ（振り戻し）、2004年西へ（オレンジ革命）
 - ：いたん東へ戻るも、2014年再び西へ
 - ・ロシアによるクリミア併合、ドンバス紛争へ
 - ・将来におけるEU、NATO加盟を憲法に明記（2014年5月）

以上

早稲田大学エクステンションセンター講座

『誰にウクライナが救えるか』

–「はざまの国」の戦争と平和について考える–

第3回 ロシア、北方のフロンティア国家

2025年11月28日
エコノミスト・元ロシアトヨタ社長 西谷公明

–本日の主題–

●「ロシアについて—北方の原形」

1. プーチンがロシア国民の心を掴んだ日

「苦しく、長い、疲れ切った航海の末に、
クリミアとセヴァストポリがついに祖国の港へ帰って来た。祖国の港、ロシアへの永遠の帰還だ」
(「赤の広場」におけるプーチン大統領演説から、2014.3.18)

- プーチン大統領は、なぜウクライナ侵攻に踏みきったか？
 - ・ソ連崩壊シンドrome
 - ・プーチン支持率：60%→90%へ急上昇（独立系「レヴァダセンター」調べ）
 - ・クリミア併合（2014.3）とウクライナ侵攻（2022.2）のロシア内政における類似性
- ウクライナ侵攻3年半後のいまは（ロシア有識者インタビューから）

2. 広大なる境域帝国

「プーチン大統領、ロシアの国境はどこまで行けば見えるのですか？」
「よい質問だ。ロシアに国境などないのだよ」
(全ロシア学童地理学コンクール表彰式に際して、2016.11)

- 近代ロシアはモンゴルの殻を破って現れた
 - (モスクワ大公国独立、イワン3世、1480)
 - ・700年来の古層（西ヨーロッパ・ルネサンスの影響を受けず）

- 16世紀半ば以降（ロシア帝国、イワン4世）、陸上を南へ、東へと領土を拡大
- 18世紀半ば、ついにベーリング海峡を越えてアラスカまで到達（毛皮商人＋コサック）

- ・4世紀かけて900倍以上、北海道の3分の1から世界全土の15%へ広がる

- ロシア領土の特殊性：本国と植民地が陸続きで、かつ一体的に広がる

- 拡大した領土の長い外縁部＝獲得した本土を守るために緩衝地帯
(ベラルーシ、ウクライナ、コーカサス、中央アジア、モンゴル、ロシア極東地方など)

- ソ連崩壊とウクライナ領土（対ロシア国境）の画定

- ・民族自決 or 旧国家（帝国）の行政上の境界線
 - ソ連体制下の行政上の境界を独立後の国境として合意（1990.11）
(ただし、当時のロシアはウクライナの完全独立を想定しておらず)

3. 社会の鼓動を聴きながら－ロシアトヨタ時代－

- ウクライナ・オレンジ革命（2004.12）とロシア社会の変化

- 順風を満帆に受ける
 - ・2000年代、資源大国ロシアの復活。日本企業のロシア進出が相次ぐ
 - ・オイルロケット
(トヨタ車の販売：2万6千[2003]から20万5千台[2008]へ)

- ウクライナ、NATO加盟意思書簡を送付（2008.1）
 - ・NATOブカレスト首脳会議（08.4）、ジョージア内戦/ロシア軍侵攻（08.8）

- 遠ざかる冷戦終結後

- ・ロシアはクリミアを手放さない

- ロシア人のアイデンティティと直結
- 地中海へ開かれる地政学上の要衝

以上

早稲田大学エクステンションセンター講座

『誰にウクライナが救えるか』

–「はざまの国」の戦争と平和について考える–

第4回 ロシア経済は持ち堪えるか

2025年12月5日
エコノミスト・元ロシアトヨタ社長 西谷公明

–本日の主題–

- 強さの背景にあるものは…

1. 石油国家ロシア

- ・前史（世界地図を参考ください）
「ゾロアスター教をみよ…」
(マーシャル・ゴールドマン著『石油国家ロシア』より)

- ・ロシア革命後 – ウラル、西シベリアの資源開発
- ・ソ連崩壊後 – 資源超大国ロシアの復活 –

- プーチンのロシア
 - ・資源輸出レントを基盤とする中央集権国家
 - ・エネルギー産業の集約・国有化、石油・ガス採掘/輸出税の導入
 - ・資源大国の実像

2. ロシア経済、崩れない理由

- 崩れないロシア
 - ・戦争特需と製造業基盤
 - ・制裁の影響は…？
- ・強さの背景 “臥薪嘗胆”

→危機を経て、外圧に耐えうる経済へ

- 原油価格の長期推移から読み解く

→プーチンはその日のために準備していた？

- ・持続可能性（財政規律と経常黒字）
- ・有能なテクノクラートたち（ナビウリナ中銀総裁のこと）

※脇道へ逸れますか…

- ・有識者インタビューから（2025年11月実施、配布資料参照）

3. あとどれくらい戦争を続けられそうか？

- 景気ピークアウト、後退から低迷へ

- ・高金利ショック

- ・その時、企業と国民はどう行動したか？

- 中国との結束（2023年3月、習近平訪ロ）

- ・中国の支え

- ・中国経済への依存を深める

→余力を残す、すぐに崩壊するとは考えにくい

- マトリョーシカは何をば語らん

ロシア史は中央集権国家の歴史である…。

→独裁者は弱さを見せない。

（弱を見せた時が、終わりの始まり）

以上

早稲田大学エクステンションセンター講座

『誰にウクライナが救えるか』

–「はざまの国」の戦争と平和について考える–

最終回 コウノトリは見ている

2025年12月12日
エコノミスト・元ロシアトヨタ社長 西谷公明

–本日の主題–

●陸と海と

1. 歴史は4度繰り返す？

- 後世の歴史家はどう記すか
 - ・歴史の断面として
 - ・ソ連崩壊後の新局面として
 - ・グローバルな視点から

- ウクライナ独立戦争
 - ・北方戦争に乗じて（ポルタヴァの戦い）
 - ・ロシア革命期（ウクライナ中央ラーダ政府の樹立）
 - ・独ソ戦に乗じて（西ウクライナにおける農民蜂起）

2. 旋回する西側世界

- バイデンからトランプへ
 - ➡大西洋同盟から一国単独主義へ
 - ➡「終わらない戦争」から「終えるべき戦争」へ

- ・和平の調停役（前政権が始めた誤った戦争の「後始末」）
- ・アメリカによる「損切り」（援助の停止、兵器の有償化）
- ・ヨーロッパの困惑、限界の露呈（兵器と資金の両面で）

- 支援が滞るとき
 - ・アメリカの支援が止まる
 - ・戦争のコスト
 - ・欧洲による肩代わり
 - ・「賠償金ローン」が意味すること

※ここで一服

「世界史は陸の国に対する海の国たたかい、
海の国に対する陸の国たたかいの歴史である」
(カール・シュミット著『陸と海と—世界史の一考察』より)

この 1 年の世界の動きを振り返ると…
– 米・中、米・ロを基軸として回転
– 他方、ヨーロッパは「はざまの国」を守れるか？

結びにかえて – コウノトリは何を思う？

- 戦争の現在地
 - 【ケース I】ゼレンスキー政権の自壊（最悪ケース）
 - 【ケース II】終わらない戦争（最悪ケースを避ける）
- 根っ子はどこにあるか？
 - ・地政学上の選択に揺れた 30 年
 - = 逆にいうと、ウクライナ国民としてのアイデンティティを形成できなかった 30 年

→ウクライナは国家の在り方、国家論を問われている

- ・遠いヨーロッパ
- 詰まるところ、ヨーロッパにとり、ウクライナとは何なのか？

- 将来における「主体的中立」という選択肢
- ウクライナの将来は、ウクライナ国民自身が決めるべきこと

ウクライナの安定はウクライナ国民にしかできない

<了>